

洋の東西を問わず、古来、詩人・作家・哲人で大自然の中に生活の憩いを求め、そこに新しい生命力を求めた例は枚挙にいとまがない。しかもそのほとんどが、自然の中に求め、または自然の中で感謝したものは、孤独と静寂とである。

先日、たまたまドイツのある自然公園を紹介する文章を読んでいたら、執筆者がその公園で見出した最大の喜びをその公園のもつ静寂さだ、と書いていたのを見て、いままらのように冒頭に書いたことを思い浮かべたのである。

自然保護公園または国立公園の意味、その利用価値というものは、いろいろとこれを教えあげることができよう。珍しい、または重要な学問上の保護対象または地域ということ以外では、景観上の美しさ、または広大な自然景観ということとその利用価値が考えられるが、それらのじつさいの利用は、人によって非常に多様なあり方があるである

う。そして公園管理者としては、一方で重要な自然景観を保持しつつ、他方では、いかに多くの人がよく利用し得るかを考えてその設備を準備している。

しかし、非常に残念ながらわが国では、静寂ということの意味をじゅうぶん自覚していないのではないか。どこへ行っても、拡声器を通して無用な案内、非音楽的な音楽が流されているのが現状である。

ドイツのその自然公園というのは、じつはリューネブルゲル・ハイデで、広々とした荒野とそれを一面に埋めるハイデ、諸所に群生する杜松、それら全体を囲む美しい森林など、ドイツの多くの自然公園の中でも、もつとも特色のある公園のひとつなのである。しかも、その公園のもつ静寂さをとくととりあげた人の言葉に、私はいまさらながら大自然のもつごくあたり前の、しかももつとも重要なものを思い出させられた気持ちがあったのである。(理事長)

自然の静寂

井手 實 夫

